

講演②

朝鮮式山城の特徴

—主に兵站と備蓄について—

講演者紹介

赤司 善彦（あかし よしひこ）

明治大学文学部卒業。福岡県教育委員会、九州歴史資料館、九州国立博物館、福岡県教育庁総務部副理事兼文化財保護課長を経て、現在、大野城心のふるさと館館長。大宰府跡の発掘調査に長年携わる。専門は日本考古学。

講演② 「朝鮮式山城の特徴―主に兵站と備蓄について―」

大野城心のふるさと館館長 赤司 善彦

みなさんこんにちは。著名な古代山城である大野城跡のある大野城市に今年開館しました大野城心のふるさと館からやって参りました。先ほど鞠智城のマスコットキャラクターである「ころう君」が舞台に出ていましたが、大野城市のマスコットキャラクターは「大野ジョー」君と言います。大変人気がありまして、現在行われている「ゆるキャラグランプリ」では、今日の段階で暫定六位に付けているようです。大野ジョー君にも投票よろしく願います。

私の話は本日の資料編の二十三頁からです。これに沿ってお話いたします。皆さんお座りの椅子の右袖の下からテーブルを引き出しますので、資料集をその上に載せてお使い下さい。

はじめに

さて、私に与えられましたテーマは朝鮮式山城です。朝鮮式山城とは文字通り、古代の朝鮮半島に源のある山城ですが、研究者の多くは一般的には用いま



せん。あくまで学史的な用語として使っています。対をなす神籠石式山城と併せて実体としては古代山城という言葉で統一しています。

朝鮮式山城という用語を用いる際には、もう一つ『日本書紀』などの古代の出来事を記した日本の正史などの史料に城の名称が記してあるものことです。これに対して神籠石式山城は史料に名称が登場しない城のことです。

朝鮮式山城は『日本書紀』・『続日本紀』に十一城の名称が記載されています。この他にも福岡県糸島市の怡土城や博多湾岸にあったとみられる大津城なども史料に名称が記載されていますが、狭義の意味での朝鮮式山城からは除外しています。このうち現地で確認され一般的に認定されているのは僅かに六城だけです。

一・朝鮮式山城とは

さてこれらの築城の契機は、先ほどからお話に出ている六六〇年に唐と新羅によって百済が滅んだことに始まります。百済滅亡の方を受けて救援軍を百済の遺臣から要請を受けて、倭国（日本）は援軍を出します。友好国に援軍を出すというのは、まさしく我が国初の集団的自衛権の行使に他ならないのですが、結局は六六三年に白村江で大敗してしまいます。その後、唐や新羅と戦争状態に入っていることから、次は我が国が攻められるかもしれないために、防衛戦を構築することになります。（図35）

白村江敗戦の翌年に防人を配備したり烽火を配置したりして、さらに水城を筑紫に築きます。それ以降六六七年あたりまで大野城などの古代山城の築城記事が続いています。それから、鞠智城・大野城・基肄城などの修理など修理の記事が六九八年まで続き、七〇一年からは今度は廃城記事になります。七一九年まで廃城記事です。わずかに五十年間の間に、築城・修理・廃城の時期が凝縮されています。非常に短命だということが史料から見えてくる特徴です。

二・朝鮮式山城の特徴

立地

さて文献史料が語る古代山城の姿は、これまでにお話がありましたので、実際の遺跡についてみたいと思います。山城は九州北部と瀬戸内そして大和に設置されるのですが、今日は皆さん、朝鮮式山城は初めて名前を聞いたという方も多いと思いますので、これからは九州北部の弾丸ツアーでどんどん写真を紹介しますので、皆さん写真ツアーに参加して下さい。

まずこれは九州北部の福岡市の南側に入ったところに太宰府天満宮もありますが、古代の大宰府政庁が



図35 白村江海戦の図

あった場所です。その航空写真です。（写真33）大宰府政庁の北側に大野城が築かれています。ところで、仮に唐・新羅の軍隊が攻めてくるとしたら、当然海から船でやってきて上陸してきます。対馬・壱岐を経由して玄界灘の沿岸から上陸するのですが、どこからでも上陸できません。断崖が多くて湾のようなところ

でないと上陸できません。鎌倉時代のモンゴル軍が侵攻してきた時と同じで実際には航路がありますので、博多湾を目指して上陸することが想定されます。だいたい博多湾あたりに上陸するのはまちがいないと思います。

これは大野城と水城です。（写真34）博多湾から内陸の福岡平野の一番奥のところに狭い平野があるので、幅一・三キロほどの地峡帯がありまして、そこを水城という土塁を築いて遮断してしまうのです。こ

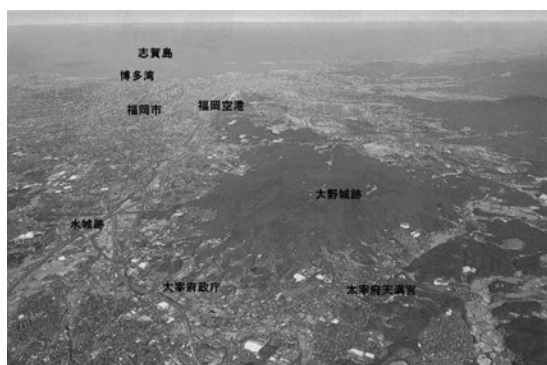


写真33 太宰府上空より博多湾を望む



写真34 水城跡と大野城跡

これは現在でも九州の高速道路や鉄道などの交通路が狭い場所を通過する交通の要衝です。ここを完全に塞ぐために水城を築くということにしたのです。

『日本書紀』には「水を貯えしむ 名付けて水城という」と記されていますが、ではどこにどのよう水に水を貯えたかという点、調査の結果、水城の土塁の前面（博多湾側）で幅六〇メートルの濠が発見されました、外濠を設けて、ここに背後から水を流して貯えたと考えています。しかし、濠がない部分があり、高低差のあるところなのでどのように溜めたのか判明していないこともあって、この考え方は確定してはいません。それからもう一つ、次は大野城です。水城に隣接した山、四王寺山といいますが、この山中大野城が築

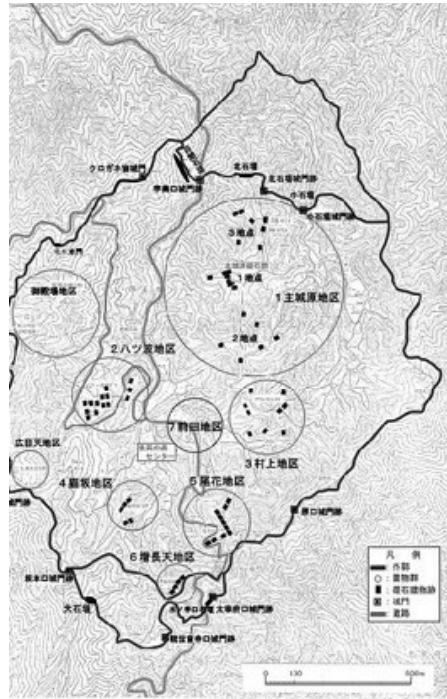


図36 大野城跡遺構配置図



図37 大野城跡レーザー計測図

かれます。写真のように朝鮮式山城という山城は非常に規模が大きいのです。(写真33) この図の城壁はイラストでデフォルメしていますが(図38)城壁が万里の長城のように描かれていますけど、ここまで城壁は明瞭なものではありません。

内部にはいろんな倉のような建物があり、また城壁には城門があります。

古代山城を構成する要素には、このよ

うな城壁が最も重要ですが、土塁や石塁があります。そして建物としては城門があり、各種の建物が造営されていたと考えられます。ただし、古代山城では建物がよく確認されている例は実は少ないのです。

さて、大野城の代表的な城壁を紹介します、百間石垣という大野城の北側に設けられた石積みを主体にした城壁です。(写真34)名前の通り百間の長さがあります。古代の尺度では一間が一・八メートルですので、一八〇メートルあります。おそらく偶然ではなく当初から百間という長さでの設計があったと思われる。規格に厳しい律令社会ならではだなどと感じします。高さは七メートル在ります。



写真35 大野城百間石垣

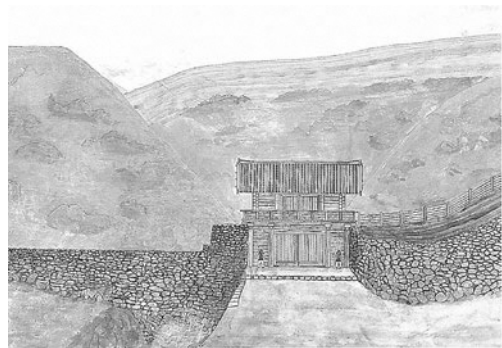


図38 大野城太宰府口城門建物イラスト



写真36 大野城跡八つ波礎石群



写真37 基肆城跡土塁

それから、大野城には内外の出入りをするための城門が設けられています。この写真は復元建物です。(写真35) 次に城内にはこの写真のような高床式の倉庫群が整然と建物の棟方位を合わせて配置されている状況です。(写真36)

次は、大野城の南方の佐賀県と県境にあります基山に築城されているのが基肆城です。こちらは大野城と同じ年に築かれた朝鮮式山城です。両者の間は七、八キロ離れています。その間には現在の太宰府市と筑紫野市所在する小平野といえます。盆地状の地形がありまして、古代に大宰府政庁や大宰府の都市が形成された場所ですが、これを挟んで北に大野城、南に基肆城があるということになります。大宰府を守護する山城です。

この写真は基肆城の土塁線です。(写真37) 草が茂っていますが明確な土塁遺構を現地で見ることができません。城壁の土塁線の規模が大きく周囲が五キロあります。大野城も六キロ以上ありまして、大野城の場合ですと、現代人は足が弱いので私でもおおよそ一日はかかります。ですから戦国時代の山城とは規模が違って大きいということがお分かりになると思います。



写真38 基肄城跡で新しく発見された水門



写真39 高安城跡から大阪方面を望む

り道である水路を内部につくりますが、これを水門と呼んでいます。基肄城の場合には大きな水門が一つありました。人が中を通れます。今も水が流れています。数年前にこの石塁の解体修理をされた折に、水門が三つ発見されました。写真の人が立っているので大きさが分ると思います。(写真38) この三つと先ほどの大きな水門は作った時期が異なり、次期差があると考えています。

さて、次の写真は高安城です。(写真39) 先ほどのお話にもありましたが『日本書紀』では、大野城・基肄城の築城に続いて六六七年に対馬の金田城・讃岐の屋島城とともに「大倭高安城」が築かれています。

基肄城の城壁は谷を渡る
ところは石塁を築きます。
そこには水を外に流すため
の水門があります。古代山
城は山の地形を利用して
いますので、梅雨や台風な
ど大雨で土砂崩れが最も恐
ろしいために、水の処理が
重要になります。そのため
に石塁で強固にして水の通



写真40 高安城から飛鳥地域を望む



写真41 高安城内の土塁



写真42 高安城跡の礎石建物群

地図をご覧になるとお分かりのように、現在の大阪府と奈良県の県境にありまして、国宝『信貴山縁起絵巻』で知られています信貴山と、高安山をめぐるようにして築城されているとみられます。写真はこちらが東側の大阪方面、そしてこれが西側の飛鳥方面を眺めたところです。(写真40)

この写真は木立の中に残る土塁です。(写真41) 土塁が大変低いので明瞭ではありません。そのようなこともあり高安城の城壁線はまだ確定していません。大正時代以来さまざまな復元案があります。高安山付近の城内にはこのように大野城の倉庫建物と同じような建物の礎石があります。(写真42) 文献史料では高安



写真43 屋島城跡遠景



写真44 屋島城跡遠景

城は八世紀初めには廃止されたことになっていますが、ここから出土した土器は八世紀後半の土器でした。奈良時代を通じて高安城は存続していたと考えられます。

次は、高安城と同じ年に築城された讃岐の屋島城です。香川県高松市に所在します。瀬戸内海を望む海辺の高い山にあります。空撮した写真ですが、(写真43)ここはメサ地形というのですが、周囲が侵食されたテール状の台地のことですけども、そのような独立した山です。断崖絶壁の地形です。今は陸続きですが、もともとは独立した島だったのです。そのため屋根のような島という意味で屋島と呼ばれていたようです。こ

の山の頂上に城壁が部分益に発見されています。下から見るとこのような写真になります。(写真44)拡大するとお分かりのうちに、絶壁が自然の要害になっていますので、あえて城壁を作る必要がありません。自然の城壁ですね。たぶん敵が攻めてきてもここを登ることは不可能です。そのような場所に屋島城は

内部に登って入れないというものでして、非常に防御性の高いものです。大野城や金田城などでも採用されています。

それからこちらは、長崎県対馬市の金田城です。地図にありますように対馬は南北に約六十キロと長く上島と下島からなりますが、その間ぐらいに浅茅湾という多島海といえますかおぼれ谷のような複雑な地形をした湾があります。本来は浅い湾という意味かもしれませんが。この浅茅湾ですが天然の良港となっています。



写真45 屋島城跡の整備された城門



写真46 対馬浅茅湾

築かれています。

この写真は三年前に復元整備された城門でして、(写真45)ちょうど開幕式の様子です。この城門の前面は、高い段差があります。亀田さんの話にもありますが、韓国では懸門という漢字をつけています。

梯子を懸けるので、懸門です。はしごを懸けないと

黒潮や日本海の荒波の影響を受けない穏やかな内海です。(写真46)
二年前に金田城へ海からカヌーで行く機会がありました。この写真がそうですが、(写真47) 海の背後の山に金田城があります。湾を回り込んでこの山の背後に行きますと、こちらの写真のように城壁線が見えます。(写真48) 金田城の城壁は海に面しています。しかもほとんどが石積みです。他の古代山城の城壁は土塁が多いのですが、ここは石積みでして、あまり土がなかったからではないかと思います。現地の状況でかならずしも土塁にこだわっているのではないのです。

これは城門の写真です。(写真49) ずいぶんと壊れていましたが、現在はきれいに整備されています。こ



写真47 金田城跡遠景



写真48 金田城跡石塁による城壁



写真49 金田城跡三ノ城戸城門

こも先ほどの屋島城と同じ懸門構造の城門です。前面に段差があり正面から見ると、城門の石垣が凹形になるものです。新羅山城の特徴的な構造ともいわれていますが、このような門の構造が朝鮮式山城に採用されているという共通点があるといえます。共通点は石積みにもあらわれていまして、写真のように自然石を割って大きさをそろえた割石を積み上げています。金田城の石積みで後世に積まれたところがはっきりわかる場所があります。写真は城壁の外壁に設けられた角形の突出部です。（写真50）下は乱石積みという加工をあまり施さない石英斑岩の石材を積み上げますが、上の方は加工した平板な砂岩を整層積みしています。上は江戸時代の寛政年間に外国船出没に対する防備のために、金田城の一部が再利用された時の石積みです。突出部は防御性を高めた城壁構造ですが、明確なものはお大野城にはありません。

次は、熊本県の鞠智城です。説明については、先ほどビデオで調査成果を皆さんご覧になったのでここでは割愛します。

これからの話はこれまで個別に紹介してきた朝鮮式山城の全体的な共通点や特徴は何かということ考



写真50 金田城跡一ノ城戸突出部

えたいと思います。最も重要なことは築城技術です。どのように築城したのかということを知りたいのですが、多くの一般書籍で語られているのが、『日本書紀』に百済の達率を遣わして築城したという記述です。達率というのは百済の貴族階級のことです。つまり、すべて百済の築城技術でつくられたという解釈がある意味ステレオタイプ的ななされています。

しかし、そこはよく考えないといけないわけです。築城技術と一口に言っても、軍略的に城壁をどのように巡らせるか、あるいはさまざまなしかけの配置を設計企画する軍事技術があります。次に城壁などを築くために土塁構築や石を積み上げたり、あるいは地形を掘削して整えたりする土木技術があります。さらに城門建物や倉庫などを建てたり、瓦を焼いたりする建築技術があるのです。

これら軍事技術・土木技術・建築技術すべてがほんとうに百済の技術であるのかというと、そんな単純なことではないのです。たしかに百済人が関与したと史料から読み取れるのだから、古代山城は百済人が作ったと考えるとストーリーとしてとても分かりやすいと思うのですが、考古学的には日本古来や在来の技術との関わりは考える必要があるのです。

土木技術は弥生時代に海外の新しい技術が持ち込まれて発達しています。先ほど亀田さんのお話にもありました、敷粗朶工法や敷葉工法という要するに軟弱地盤の上に枝葉を敷くことや、土塁になかに葉っぱの層をかませるというような工法は、弥生時代の吉岐で発見された原の辻遺跡の船着き場で確認されていますし、大阪の七世紀初めに築かれた狭山池の堤防でも用いられているのです。つまり山城築城以前にこうした

技術は日本に定着していたのです。

それから土塁を築く版築工法ですが、版築の版は板のことで築は土を突くという意味です。つまり板で囲った土を木の棒などで搗いて固く締める工法でした、本来は中国の黄土地帯の樹木がない地域で、建物の壁などを黄土の粒子の細かな土を搗いて作ろうとした発想が始まりです。しかし、非常に硬いのです。その技術が朝鮮半島を通じて日本列島に入ってきたなかで、少しずつ変容したのは間違いないと思います。古墳時代の終わりごろに仏教の寺院建築がもたらされた時に、寺院の基壇つまり建物の土台をつくる技術として、すでに六世紀代に技術的には知られているのです。

今日は触れませんが、七世紀の日本列島にも匠（たくみ）の人たち、職人さんですね。石工の人たちとか古墳の石室を積み上げた人たちもたくさんいたはずですよ。彼らが果たして百済の技術を簡単に受け入れたのかどうか、つまり百済人の言うままに自分の技術は使わずに従順に働いたのかどうか考えることも想像力として大事です。歴史とはいえ生きていた人たちのことを考えなきゃいけないということです。

まずは軍事技術からみていきたいと思います。朝鮮式山城の特徴はとにかく、城壁の範囲が広いということですよ。規模が大きいのです。

次に山の高い位置に築城しているということです。ところで、『日本書紀』には山城という名称はありません。あくまでも城、音読みでキと書いてあるだけなので山城という名称も適当でないかもしれません。ただし、平野でなく山を選択しています。どうして山を選んだのか。これはたぶん軍略というか軍事技術に関

わる事だろうと思います。それはなんとも山の上につくる山城にはメリットがあるということです。

皆さんは山に登った時にまず何をなさいますか。高い山の山頂に到着したら、お弁当を開くという方もいらっしゃるかもしれませんが、やっぱりまずは眺めですね。周囲だけでなく眼下の眺望を確認されると思います。これは高ければ高いほど遠くが見えますし、高所の一番のメリットだと思います。敵の動向を観察することができなのがメリットです。そしてその敵の動向に合わせて兵を動かせます。下の平地からは山の上の人たちはなかなか見えません。城壁から覗いている人を下からは見ることができません。それに平地の敵兵は道を通りますので、視認しやすいのです。

また、山を守るというのも戦では攻めるよりもメリットがあります。下から登ってくる兵は大変です。ふう言いながら登ってきて、そこに山城側の兵が待ち構えているのですから。さらには当時武器の主力は弓矢です。下から上の兵を狙って矢を飛ばしてもなかなか当たらないでしょうが、上の兵士だったら、前面のいる兵士だけでなく後方の兵士にも当たりますし、重力で威力も増します。

このように高所を陣取ると大変メリットがあり、敵の人数より少なくても大丈夫だというのが山城の利点です。

ただし、デメリットもあります。高ければ高いほどいかというと、食料や武器などの補給が困難になるのです。食べ物がなければ餓死するわけで、戦乱に明け暮れた戦国時代の場合にも食べ物の確保が大変でした。時には略奪するしかないわけでした、近代も含めて戦争では戦鬪で死ぬより餓死者の方が多いという話

もあります。いかに補給路を確保して前線に物資を届けられるかが戦の勝敗を握っていると言ってもいいでしょう。

少し話が脱線しますが、高い山に山城を構えて陣取っても、平地の敵兵はその山をスルーして、横を通っていけばいいじゃないかという人がいます。実はそんなことをやっても意味がないのです。仮に新羅や唐の軍隊が上陸してきて、福岡平野の奥にある大野城をスルーしても、では彼らはどこに行けばいいのでしょうか。近畿を目指す道をして居るのでしょうか。そもそも近畿がどこかも知らないと思います。手引する人がいてもどうやって物資や進むルートを確保できないと思いますし、道を進んでも夜に大野城から降りてきた

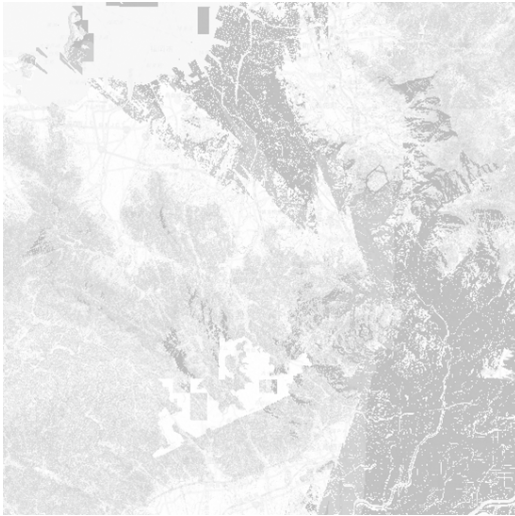


図39 基肆城跡可視領域

兵士に背後を突かれたら大混乱です。戦では兵力と兵力を使って相手の兵力をつぶさなければなりません。地勢に明るくない海外の兵団が、九州北部の山城や軍団のいる拠点をスルーすることはないと思います。机上のゲームではないのでスルーするという発想がないと思います。

さて、眺望の話をしました。ここで最近実施した古代山城の眺望分析について紹介します。このスライドは大野城の土塁線のいくつかの地点を選んでGIS（地理情報システム）の手法で眺望分析したものです。黒く網をかけたところが眺望できる範囲です。山の頂上に登っても、実

際には樹木に覆われていて下界は何も見えません。デジタル地形図を作成して地図に示したのですが、大野城の場合には北の福岡平野それから博多湾の方角が可視可能範囲です。東南に阿志岐城という山城があるので、これが邪魔して眺望がよくありません。南の基肄城はよく視認できます。こちら側は実際に大野城の土塁線からも確認できます。北側の一部分は視認できません。ここには海の向かって延びる山稜があるからです。

このスライドは基肄城の眺望分析です。(図39) 基肄城も樹木が高くて実際にはすべての山頂稜線からの眺望はできません。特に北側は見えないのですが、デジタル地形図で可視範囲をこのように示すと、博多湾も一部を見ることが実は可能なのです。見えないと思っている研究者が多いのですがそうではありません。しかし、部分的にしか見えません。やはり眺望が開けているのは東と南です。筑紫平野と呼んでいます。筑後平野と佐賀平野を合わせた呼び方ですが、この写真のように遠くまで見通せます。天気がいい時には島原の雲仙普賢岳まで見えることがあります。基肄城の場合には、北側の博多湾側ではなく、筑後川によって形成された筑後平野をにらんで築かれているということがお分かりになると思います。

このように結論的に言いますと、古代山城の立地は共通する特徴として高所に位置することで、それは眺望ということを意識した選地だということです。戦における眺望との関わりで、『日本書紀』によると、七世紀の同時代の事例として壬申の乱というのがあげられます。先述した大和の高安城は大阪平野と奈良盆地の間に位置しています。天武朝の軍が高安城を占拠している時に、河内方面の近江朝の軍勢の動向を把握

して、近江朝軍の迎撃に降りていったという話が掲載されています。

戦闘では高いところを陣取り、敵の動向を把握し峠などの攻撃に適した場所を封鎖するなどして、迎え撃つことが戦術的に重要です。朝鮮式山城はそういうよく似た立地の特徴があります。鞠智城は立地する標高が低いです。けれども平地との比高差は結構ありますので、やはり他と同じように周辺への眺望の確保に加えて、断崖のような自然の要害という好条件を兼ね備えているので、眺望第一で選ばれた場所だったと思います。

こうした眺望のために高所に位置し、規模が大きいというのは朝鮮半島の三国時代でも百済時代末期から採用されたもので、どちらかというと百済の後ではないかという見方もあるようです。

土塁

次に土木技術を見てみたいと思います。このスライドは大野城の土塁の版築の状況です。（写真51）多くの土塁は、万里の長城のような城壁の両側が壁ではなく、外壁を作りますが、内側は丘陵斜面にもたせ掛けするようにして土塁を築く片壁式ですね。上部は両壁式になります。この盛り土して突き固めるというやり方



写真51 大野城跡土塁

です。この大野城で確認できた版築技法の堰板を紐や棒でひっぱって留める方法は、まちがいなく百済の扶蘇山城で調査の際に発見された技法で、韓国の研究者にも確認してもらいました。

それから先ほどの亀田さんの話にありました版築でなく、土を上から棒で搗くだけの土塁構築の技法があったのではないかとありますが、これは重要な指摘で、同感です。

盛り土はお墓作りにみられますが、すでに弥生時代の佐賀県吉野ケ里遺跡の墳丘墓は大変有名ですが、そこもがちがちに締った盛り土です。それからさんご存知の古墳ですね。前方後円墳と呼ばれる古墳も非常に高い墳丘が構築されています。特に六世紀以降の古墳の墳丘は高くなることが指摘されています。版築技法ではなくとも土木的に高い盛り土が可能なのです。例えば、どのう積みといがあります。版築の堰板の代りにどのうのようなものを積み上げて一定の高さにしたら、その内側に土を盛り上げていく方法です。在来工法でも高い盛り土は可能だというのは知っておく必要があります。すべてがその時代に伝えられた渡来の新技術だと考えるのは間違いだというご指摘だったと思いました。

次に石積みや石垣があります。これには総石垣と貼石垣があります。これも朝鮮式山城に特徴的な石積みの姿です。先ほど紹介した対



写真52 大野城跡百間石垣石塁



写真53 大野城跡増長天地区礎石建物跡

馬の金田城は総石垣です。大野城の百閒石垣も総石垣の場所と上に行くほど貼り石垣が用いられています。写真にありますように岩盤に石垣を築き、控えの少ない内部にグリ石を充てんします。(写真52) 写真が小さくておわかりにくいのですが、背後の控えがほとんどないのでグリ石も入れられていない事例もあります。

石積

また石積みでは石材の加工、ほとんど行わず、割った状態の割石を用いることが多いです。神籠石式山城には石材を加工した切石を使う事例も多いのですが、朝鮮式山城では割石で、しかも大人二人が持ち上げられる程度の大きさが多いですね。城壁の上部になるほど石材が小さくなります。これは戦闘の折りには、落とし石や投石に使うために軽い石を使用するという魂胆かもしれません。

さて、この大野城の百閒石垣というとても豪壮な石垣があります。私の勤める大野城市の新しい博物館には、この百閒石垣をレプリカで再現し、その地上からの高さをクライミングで体験してもらうコーナーがあります。とても大人気です。

石積みで付け加えますと、石垣の内部を充てんするグリ石ですが、近世のお城の石垣は砂利石を持ちることが多いですが、朝鮮式山城では人頭大のグ

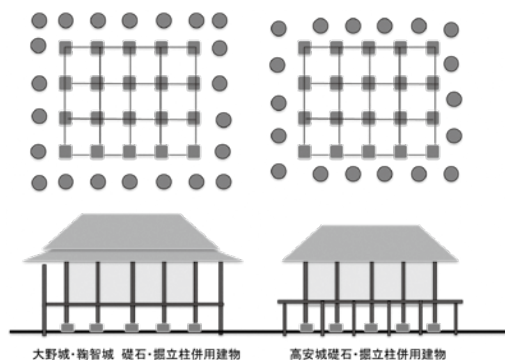


図40 礎石・掘立柱併用建物模式図



図41 大野城跡増長天地区復元イラスト

り石を用いることが特徴です。

施設

次は朝鮮式山城に特徴的な建築技術です。特別な事例を紹介します。この写真は、大野城跡の増長天地区で確認された礎石建物です。（写真53）このような建物の床を支える柱をくまなく碁盤の目のように立てたものを総柱建物と呼び、高床の倉庫だつたと考えられ

ます。興味深いのは礎石の周囲に掘立柱式の柱穴が巡っています。整然と並んでいます。

調査で判明した痕跡や礎石と柱穴のあり方から、この図のような変わった建物が復元できます。（図40）

瓦葺きの屋根からなる木造の高床倉庫です。二重の屋根だつたと考えられます。こういう珍しい建物の礎石にお注目すると、礎石・掘立柱併用建物と呼んでいます。非常に特殊ですがこのタイプのものが古代山城にのみ存在しています。大野城だけでなく鞠智城にありますし、さらに遠く離れた大和の高安城にもあります。ただし、高安城の掘立柱穴はすこし並びが異なります。

大野城の増長天地区の復元イラストがこれです。(図41) 瓦屋根の外側にさらに二重に屋根があります。この外側の屋根はある段階で取り払われてしまっています。臨時的な屋根だったのです。礎石の周囲を巡る柱穴は、私は倉庫を取り巻く板塀と考えていましたが、最近の調査で、柱穴の外側に雨落ち溝が伴っていることが分かりました。つまり、屋根がかかっていたということになります。以上、このような特殊な建物も朝鮮式山城の建築に共通する様式です。

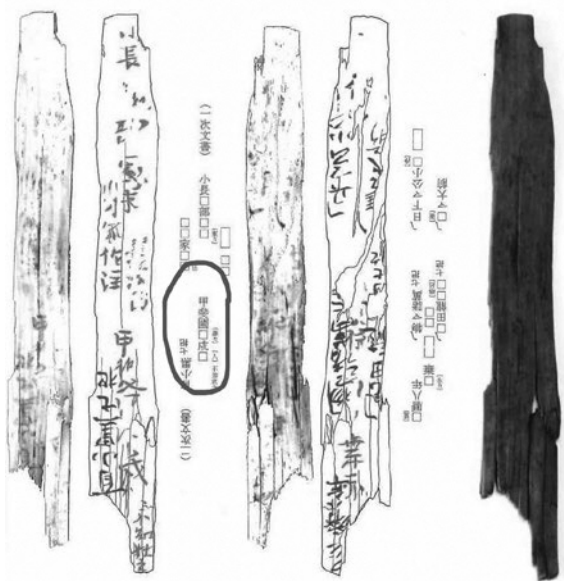


図42 唐津市中原遺跡出土木簡

三・古代山城の兵士

さて次は古代の兵士について二六頁あたりになりますが、中央政権は、白村江敗戦後にそれまでの豪族主体の軍事のあり方から、中央主権的な軍事体制を強化しようとしています。その柱は徴兵制が敷かれていくのですが、そういう人たちが古代山城に配備されていきます。その証拠となる資料が、佐賀県唐津市で出土した木簡です。甲斐国の戌人に関する内容です。戌人とは防人のことです。今の山梨あたりから徴兵された防人が、任期

が終わった後も今の唐津あたりにそのまま帰らずに残ったことを示すのだと思います。(図42)

この写真は七世紀末頃の本簡です。太宰府市の松本遺跡から出土しました。「兵士」という文字があります。嶋評という地名が記載されています。嶋というのは今の福岡市の西隣の糸島市の地名です。その戸籍の作成についてですが、徴兵していることが分かる資料です。つまりこの七世紀後半になると、先述したように各地の豪族の寄せ集め軍隊ではなく、統制の取れた軍団制という軍事制度に移行していたことを遺物で確認できる貴重な文字資料です。古代の大宰府では、この軍団制と海浜部を守護する防人制の二本立てでした。軍団は今の県に当たる各国に置かれていました。

四・朝鮮式山城の兵站

ところで、このような軍事機能というものが、本当に朝鮮式山城の中で遺構や遺物として確認することができるのでしょうか。兵站機能が重要と言いましたが、実際に武器や武具あるいは食糧などを大野城に備蓄していたのかどうかお話ししたいと思います。

大野城の建物跡の変遷をみますと、主城原地区という大野城の北側にあって、見晴らしも良く比較的広い場所があります。ここでは建物が長期間にわたって何度も造営されていますので、その前後関係が把握できました。基本的に建物というのはそれほど建て替えられません。掘立柱建物という建物の場合、これは屋根を支える柱を礎石の上に据えるのではなく、地面に穴を掘りそこに柱を埋め込む縄文時代以来の建築です。

が、考古学的には二五年ぐらいで柱が朽ちるので、建て替えるとはよく言われているのですが、そんなことはないのです。奈良の正倉院は千年以上、今日までその姿を保っています。もちろん数十年ごとに補修されていますが。なので、火災などの災害にあつただとか、よほどの理由がないと建て替えられません。主城原地区はかなり頻繁に建て替えられています。その原因はよく分かりません。しかし、この地区の建替が発掘調査で分かったことで、大野城の建物の変遷が明らかにできました。

七世紀後半の築城期の建物は、掘立柱建物の側柱建物です。内部が土間構造の建物、要するに高床ではないものが建てられます。次に掘立柱建物の高床建物に変更されます。ところで、今日の発表では建物の規模を示すのに間数（けんすう）を用います。一間、二間、三間というふうに言います。それから建物の平面プランは長方形に成ることが多いのですが、の短辺を梁間、長辺を桁行といいます。それから側柱建物は長方形に柱が並んでいて、内部に柱がありません、これに対して内部に碁盤の目のように柱があるものを総柱建物と呼んでいます。重量のある床を支えるために、何本も柱があるのですが、これが高床の倉庫です。

これらの建物のある場所からは、先ほど申しましたように軍事施設なので弓矢の矢や武具などが出土すると思っていたら、全く出土しません。実は日本の古代山城からは武器・武具が出土しません。これまでに確認できたのは鞠智城で弓矢の鉄鏃が一点だけです。韓国の山城では武器や武具が見つかったのですが、日本の古代山城では全く出土しないのです。もちろん、文献史料には大野城に城庫の名称や、鞠智城に兵庫の名称が出てきますので、存在していたのはまちがいないのですが、出土しません。

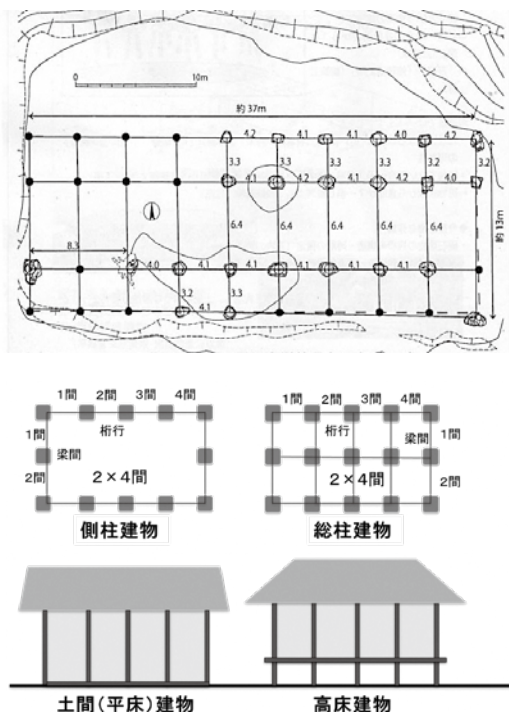


図43 蔵司地区礎石建物及び建物模式図

が、痕跡がないのです。つまり山城内に備蓄されていなかったと考えられます。また、廃城時に持ち去るといものも考えにくいです。となると、戦闘時以外は別の場所で管理されていたと思われるのです。

ではどこから出土するかというと、平地です。大野城では南のすぐふもとに大宰府政庁がありました。その横に「蔵司」と呼ばれている丘陵があり、昔から蔵を司っていた役所があったと言われていました。近年、その蔵司を九州歴史資料館によって計画的な発掘調査が行われています。大変大きな礎石群があったのですが、スライドにみられるような梁行三間、桁行九間という内部に柱も備えた格式のある建物が確認されました。(図43)

何が考えられるかというと、山城の倉庫には武器武具が備蓄されていなかった。または、廃城時に全て持ち去られた。さらに考えられることは武器類が徹底的に管理されていて、日頃は山城に持ち込まず別の場所で台帳などの管理がなされていた。ということが考えられます。兵士が大規模な戦闘訓練していたら、使用した矢がどこかに飛んでいってそれがいつしか地面に埋めれるとおもうのです

さらに隣接して、礎石総柱式の高床倉庫が数棟発見されています。物資の収納と関係のある地区だということが分ってきました。

大規模な建物の地面から火熱を帯びた武器が大量に発見されています。ほとんど弓矢でして、スライドのように束に成っている状態で発見されました。(写真54) 弓矢の弓に用いる金具や鉄鏃です。ですので、大量の武器がこの蔵司地区に備蓄されていたことはまちがいありません。平地の大宰府の官司で管理されていたことになります。大野城のような山城には武器は備蓄していませんでした。結局唐や新羅との戦争が、日本では幸いにもなかったのです。有事がおこらなかったため武器は備蓄されなかったとみることができます。兵士もそうで、平時には軍団が常駐する場所ではなかったということがいえます。

五・筑紫城の存続と備蓄

では倉庫には何を貯えていたのでしょうか。九州の朝鮮式山城を包括した用語として「筑紫城」という名称が文献史料に見えます。この大宰府が管轄した筑紫城は八世紀以降、つまり奈良時代以降も存続しています。たくさんの倉庫が継続的に管理されていました。側柱の倉庫ではなく、全て総柱の礎石建物です。瓦葺



写真54 大宰府蔵司跡出土鉄器

きの立派な高床倉庫です。

このスライドの写真は、レーザー計測による大野城の地形を示したものです。(図44) 山は尾根と谷から成り立っていますが、大野城の尾根はこのように狭いのです。この尾根のあらゆる所に倉庫を建てています。こちらは基肄城の地形図と倉庫の分布図です。大野城の倉庫の数に近い三三棟がこれまでに確認されています。規模は梁間三間、桁行五間です。写真のように鞠智城もたくさんの礎石式高床倉庫が建ち並んでいました。

この八世紀以降もたくさんの倉庫が造営されていたことが筑紫城に共通する特徴といえるのですが、もう一つ、この筑紫城の三つの山城に共通するのが、倉庫群の一つに規模の大きな長倉が必ず造営されているということです。規模は梁間三間、桁行八間から一〇間です。この長倉というのはどういふ姿かと言えば、奈

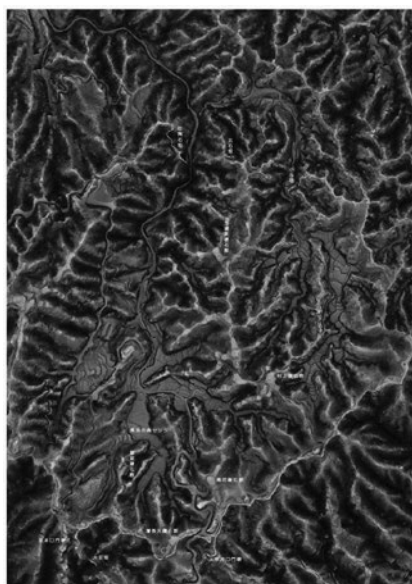


図44 大野城跡レーザー計測図

良の正倉院の建物が類似しています。正倉院は実は北倉・中倉・南倉と三つに内部が仕切られています。このような長倉が一棟あるのです。

さきほどの繰り返しになりますが、大野城と基肄城の場合ですと数が多いのは三間・五間の倉でこれが建ち並んだ景観でした。いずれも奈良時代に建てられたこの倉庫は、柱間寸法もきっちり同じです。規格性が高いのです。おそらく材料の木材も長さな

どの寸法や規格を等しくしていたと思います。奈良時代の律令制というのが世の中を制度できっちり縛ろうとする試みですが、まさしく寸分の違いも許さないような時代の空気が、建築の設計や材料にまで及んでいる気がします。

ところでこれらの倉はとても規模が大きい建物です。当時の住居に比べたら大変大きな構造物で、威圧感があったと思われます。倉が建ち並んでいる様子はさぞや壮観だったことでしょうか。では、この多数の倉庫群に何を収納していたのでしょうか。それは稲穀です。稲を脱穀して粃米の状態にしたものです。タネの状態です。現代では通常粃米の状態で買い求めて蓄えています。少し前までは糠をのぞいていない玄米ですね。玄米でも何年も保存できません。粃米ですと一〇年

近くは保存できるのです。というと別に普通じゃないかと思われませんが、実は当時一般的には田んぼで稲を穂刈りして、これをまとまった量の束にしていました。貨幣がわりに長いこと使用していました。脱穀していなかったのです。というか脱穀の必要はなく、食べる時に穂と粃を一緒に落として玄米にすればいいわけで、脱穀は手間必要なわけです。ところが、倉庫に貯蔵する時には穂の部分を外して粃米にしたのです。倉庫の内部にこの粃米をどんどん溜め込みます。イラストのように入り口に堰板を積み上げていきます。(図45)そし

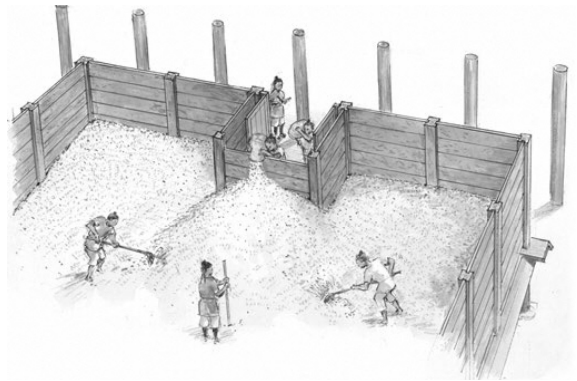


図45 高床倉庫稲穀収納復元イラスト

て最後は塞ぎます。扉を閉めて封をして錠をします。鍵はおそらく大宰府の役所か都に保管されていて、中央の命令がなければ誰も勝手に開けられないようになっていました。

そうした嚴重に管理された米倉が奈良時代の初めに大野城では三十五棟、基肄城もおそらく三十五棟が共通に配置されていたと思われます。合計七十棟の米倉を計画的に造営しそして稲穀を貯蔵したと思います。

それは何を目的としたのか。実は大宰府政庁の前面にある奈良時代の天平年間に使われていた溝から木簡が出土していて、そこに書かれていたのが、基肄城の稲穀を筑前・筑後・肥の国等に遣わして貸し与えよという大宰府の役人の命令書です。大規模な災害が起こったことに対しての救済と復興事業だと考えられます。つまり戦争のような有事に備えているだけでなく、地域のための備蓄基地であったことが分かります。

そろそろ時間がきましたので、まとめに入ります。朝鮮式山城の特徴ですが、古代山城は軍事拠点なのですが、平時には門番や敵兵の来襲の連絡を受ける見張りのような警備の兵士が詰めているだけで、城内に兵士が常駐しているわけではないことです。兵士がたくさん生活していたような遺構や遺物も出土しません。おそらく警備の兵士も野営していたようなそういうものだったかもしれないですね。

それから武器・武具も城内で生産していません。また、武器類は全く出土していません。このことから城外で生産されたものが有事の際に持ち込まれたと考えられます。中世や近世の山城のように城内で生産・使用までが完結することはないようです。あくまでも国家管理されており、特に九州は大宰府の役所が一括して生産から保管まで管理していたと考えられます。

六・大宰府と古代山城（筑紫城）の関わり

次に建物ですが、掘立柱建物から礎石建物へと変化します。筑紫城と呼ぶ大野城・基肄城・鞠智城の九州の朝鮮式山城は七世紀末に長倉という規模の大きな倉庫が造営されます。そして奈良時代に入ると定型化した梁間三間、桁行五間の礎石高床倉庫が建築され始めて、数を増やしていきます。さらに九世紀前後になると今度は梁間四間、桁行五間の少し小さな礎石式高床倉庫を建築し始めます。これは建て替えてではなく増やしています。このような変遷を辿っています。基肄城は表面調査だけで建物の発掘調査が実施されていますが、八世紀の奈良時代は同じ歩調で歩んでいます。鞠智城は少し異なりますが、しかしほぼ同様な歩調で倉庫群を造営し拡張しています。

おわりに―筑紫城の倉庫群の意義―

それから倉庫群のあり方というのは、実は各国に置かれた稲穀などの正税を蓄える正倉の規模や構成とよく似ています。しかし、古代山城は有事の際の備えということで、災害に備える必要がある現代と一緒です。つまり有事を想定してはいますが、やはり地域の安定のためには災害時には供出することがあったと言えます。管轄は奈良時代には大宰府です。それにしてもなぜ山城に倉庫をたくさん作ったのかと言えば、災害や盗難などで平地よりも安心安全のためだというほかないですね。あえて標高三〇〇メートル以上の場所に運び入れたのです。しかも大野城・基肄城合わせると奈良時代の終わりまでに七〇棟が建てられていました。

計算すると一棟の倉庫に約四千石収納できます。一石は一人が一年間食べる平均量です。四千人×七〇棟なので二十八万人を一年間養える膨大な稲穀を蓄えていたことになります。

古代山城が軍事機能から地方支配といった行政的な機能に変化したという点もあるかもしれませんが、あまり強調すると古代山城の役割がぼやけてくる気がします。宗教的な側面や行政的な側面もありますが、軍事的な機能は揺るぎなかったのではないかと思います。

最後にこの古代山城が築かれた時代は国境を強く意識した時代でした。この写真は対馬の北端から韓国の釜山を写したものです。今でもこの海のどこかに国境があるという事になります。以上で終わります。